

避難スイッチは 自ら考えよう!



兵庫県宝塚市 川面地区自主防災会
会長 喜多 毅

1 はじめに

人間の死亡率は100%で、その原因は様々です。災害や戦争による死亡ほど非業の死はありません。そんな死を一人でも減らす又はその地域でゼロにしたいという思いから防災活動を続けています。それを達成するのは「防災スイッチ」と言われる「避難スイッチ」です。その考えを教えていただいたのは、京都大学防災研究所の矢守教授であり、当時の竹之内准教授です。

2 川面地区自主防災会の活動

当防災会は阪神・淡路大震災の翌年の平成8年に宝塚市では最初に結成され、市街中央を流れる2級河川「武庫川」の左岸の9自治会で結成されました。現在は19自治会約2万人の地区となっています。組織的には、この地域で盛んな「地車:だんじり」まつりの比較的年齢層の若い地車保存会をベースに各自治会と結びついています。

防災会員は約150名で構成され、3つの分会（東、西、南）それぞれ分会長、副分会長、のもとに情報班、消火班、救出・救護班、避難誘導班、給食・給水班を配置しております。また、宝塚市の総合防災課と連携し地区防災計画を立案し、これに基づいた活動と、矢守教授提唱の「避難スイッチ」の活動が我々の活動の2本柱となっています。そして平常時には万が一の「想定外」に備えた啓発活動に重点を置いた活動を行っています。

3 分かり易い「避難スイッチ」に関心を持とう

避難スイッチに取り組んだのは、命を守るにあたって、非常に分かり易い方法であるからです。川や池の水害から逃げるタイミングを、逃げ遅れの無いように目印を決めておき、様々な気象状況やその他の情報を知り逃げる為の誰にでも分かり易い方法です。矢守教授のお話で川や池に何か目安となる「水位確認板」量水標が必要と考え、県の河川担当者と話し合い「水位確認板」を4か所設置して頂きました。

武庫川には宝来橋の橋脚（写真1）に設置、武庫川に流入する3支流、大堀川（写真2）、荒神川、一後川、には堤体に小型



写真1 武庫川と宝来橋橋脚の水位確認板



写真2 支流大堀川の水位確認板

の水位確認板を設置して頂きました。

池には防災会で設置し、これらすべてを監視・測定（防災会スタッフ21名のLINEで共有）する体制も整っております。雨量データとLINEでの現場の様子を時系列で捉え記録し（図）、昨年のデータからは予め設定した「暫定避難スイッチ」ライン（武庫川：4.5m、大堀川1.6m、荒神川2.2m、一後川1.4m）には届かず幸い避難する状況には至っておりません。今後はこれらのデータを蓄積し、雨量と増水速度から逃げ遅れの無い「適正な避難スイッチライン」の精度向上を行っていきます。

避難と言っても様々な状況で異なりますので、スマートフォンなどで川面地区の現在の状況が一目で分かるポータルサイト（気象庁・兵庫県・宝塚市などの注意報、警報、キキクルから河川、土砂、台風、現在の雨量、今後の雨量、河川のライブカメ

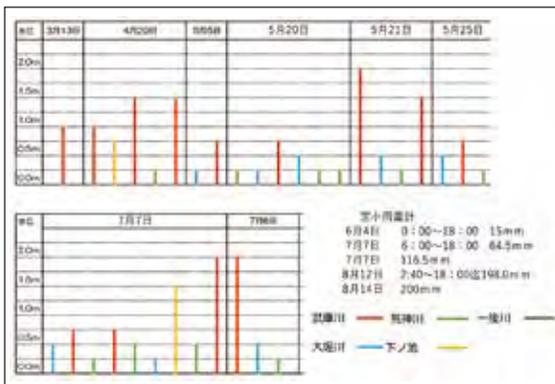


図 現場の様子を時系列で捉え記録（令和3年データ例）

ラ画像、道路、鉄道の状況、防災会の防災計画、防災マップ等）を活用していただくよう周知に努めています。これらの情報と行政が発信する情報で避難などを判断する事になります。矢守教授の提唱されているスーパーベスト（親戚・知人・友人宅などへ）、ベスト（避難所へ）、セカンドベスト（逃げ遅れた場合2階などへの垂直避難）などを予め考え家族で話し合っておく事が重要です。これらを住民の皆さんに啓発する事により逃げ遅れをなくし命を守って頂きたいと切に願っております。

4 今後に向けて

自主防災会としては啓発活動を行い住民の方に少しでも理解していただく活動の一環として勉強会や「川面地区防災新聞」の地区内全戸配布を行っています。今後に向けて降雨時の夜間の水位確認や住民の方への状況の伝達方法、行政との連携方法等多くの課題があり、少しずつ・たゆまなく解決に向け出来る所から活動を続けて行きたいと考えています。



宝塚市川面地区防災新聞